



2012-2013 年度

国際ロータリー会長 / 田中 作次
2690地区ガバナー / 森田 昭一郎

会長 / 黒田 昌弘 副会長 / 飯塚 大幸
幹事 / 釜屋 治男 会計 / 河原 治子

平田ロータリークラブ 事務局

〒691-0001 島根県出雲市平田町2280-1 平田商工会議所2F
TEL: 0853-63-3232 / FAX: 63-5365 / IP: 050-5204-5816
URL: <http://hirata-rotary.jp/> Mail: office@hirata-rotary.jp

9:00 ~ 17:00 (土・日曜・祝祭日 休局)

例会プログラム

例会日	卓話者	演題
3月14日	会員 持田祐輔	新入会員スピーチ
3月21日	米山奨学生 ツェンデアユース・ガンドルゴル 様	モンゴルについて
3月28日	平田地区自治協会 会長 村田 實 様	平田地区自治協会の 現況

出席報告

会員数	出席者数	欠席者数	出席率	前回補正出席率
41	30	11 (3)	78.95 %	88.89 %

欠席者

大島治 / 園 / 大谷 / 曾田 / 園山 / 三好 / 小汀 / 土江
(山根 / 牧野 / 木村)

来訪者

なし

メークアップ

3/7 恒松・遠藤・原泰・加藤昇・大島治・園山・伊藤(家庭集会)

次回例会受付当番

(3月28日) 小汀泰之 / 持田稔樹 / 小村益造

(4月4日) 持田祐輔 / 大島 治 / 大島卓爾

近隣クラブ例会情報 (メークアップを考えましょう)

(出雲)

(松江) 赤文字 例会変更

月	出雲中央	4/8	6/24	松江南	
火	出雲	4/2	4/30(休)	6/25	松江しんじ湖
水	大社				松江
木					松江東
金	出雲南				

会長挨拶

事業承継の二つのパトン

多くの中小企業者の場合、経営者自身が経営の中核を担い、さらに大部分の自社株や事業用資産を保有しています。そこで「経営そのもの」と「自社株・事業用資産」の二つのパトンを承継する必要があると考えています。

その一つが「経営そのものの承継」です。後継者には、企業経営者としての業務知識や経験・人脈・リーダーシップ等、経営ノウハウの習得が求められます。また、「何のために経営するのか」という経営理念の承継も大きなテーマ。さらに、このような後継者教育と合わせて、社内外に対して「新経営者として認めさせていく」ことが必要と考えています。

二つ目は、自社株・事業資産の承継です。後継者が安定的に経営をしていくためには、後継者に自社株や事業用資産を集中させなければならず、そのためには、相続を巡る紛争を防止しなければなりません。また、後継者や会社は自社株等の買い取りや相続税の納付のため、多額の資金が必要になる場合があります。事前に、これらの必要資金を確保しておくことも大事なポイントです。

以上の二つのポイントからも分かるように、事業継承は何年もの歳月をかけて取り組むべき課題と考えています。後継者に手渡すパトンを重すぎるパトンにしないためにも、これら「重要性の最認識」から始めてはいかがでしょうか。

幹事報告

1. 例会変更

松江しんじ湖 RC 4/9(火) 観桜会(夜間)
受付 12:00 ~ 12:30 すいてんか

2. 休 会

松江しんじ湖 RC 4/30(火) 定款第6条により
受付 12:00 ~ 12:30 すいてんか

松江 RC 5/1(水) 定款第6条により
受付 12:00 ~ 12:30 ホテル一畑

3. るんぴにい苑より「るんぴにい第72号」をいただきました。

次年度幹事報告

次年度委員長の発表

地区協議会のご案内

日 時 4/28(日) 受 付 10:30 ~
本会議 11:00 ~ 15:40

会 場 津山文化センター

出席義務の方ご出席下さい

次期会長

次期幹事

次期新世代奉仕委員長 次期ロータリー財団委員長

次期クラブ奉仕・職業奉仕・社会奉仕・国際奉仕委員長の内から2名

委員会報告

クラブ広報委員会 : 「ロータリーの友」3月号の紹介

スマイル

黒田 (本日はスマイルが少ないようですのでスマイルします。)

恒松 (3月7日家庭集会のリーダーをしました。にぎやかに終わりました。ありがとうございました。)

スピーチ・例会行事

新入会員スピーチ 持田祐輔 会員

子供の頃、島根のお米が美味しかったのでしょうか、小学六年のときに今よりも体重が重かったです。周囲の大人たちは、「太ってるね」と言わず、「体格がいいねえ」と言っていました。「物は言いよう」ということを学んだ最初の機会だったかもしれません。その体格が災いし、相撲大会に出場させられたり、いろいろな体験をしました。

さらに態度も大きく見えたのか小学校の頃、中学生に目をつけられ、それから逃げるために必死で勉強して島大府中、北高に進みました。高校では勉強時間が、これでもかというくらい設定され、夏休みも2週間しかない状況で、つきあう先生たちも労働基準法違反ではないかと思うほどでした。飽きっぽい性格のため、部活も水泳、プラスバンド、剣道、陸上、茶道と転々とし、「転がる石に苔はつかない」の諺通り、何一つ身につけていないようです。

大学は農大ではなく、法学部でした。父も積極的に後を継がせようとはしませんでした。というのも全国での清酒の出荷量(一升瓶換算)、昭和50年(9億7千万本)をピークに、減少の一途を辿っています。平成22年の出荷量は、3億3500万本ですから、最盛期の3分の1になっています。こういった背景があったからではないでしょうか。

お酒の出荷量が減少した理由として、昔は酒一升は一人役だったそうです。大工は棟梁クラスの人が丸一日働いてやっと1本。現在で換算すると、一升一本2万円くらいでしょうか。一升瓶は高価なものだったようです。当時は量り売りが主流で、夕方になるとおかみさんたちが徳利片手に買いにいらっしやる状況です。造れば売れたため、最盛期には全国に4000軒もの蔵がありました。今は全国で1500軒、島根県では最盛期の80数軒から30軒にまで減っています。

現在は、普通酒一本が2000円弱ですので、価格は10分の一になっています。価格が下がったのは、技術革新や機械化などの合理化にもよりますが、過当競争も原因です。この島根に80数件も蔵があり、それぞれが今の数倍もお酒を造っていたのですから、当然といえば当然です。よくそれだけお酒を飲まれたのだと感心します。

別の理由は、為替です。昭和36年の固定相場制の頃が1ドル=360円、1985年のプラザ合意以降は安くても120円程度になりました。明治の頃、ワイン、当時は葡萄酒ですか、これを飲めたのはごく一部のエリートか、夏目漱石のような文豪たちくらいだったと思います。それほど高価だったわけです。ところが戦後だけを見ても、1ドル=360円から120円ですから、単純計算するとワインの値段は3分の一になっています。ほかのブランデーやウイスキーなども同様です。洋酒は飲んでみたいけれども高くて手が出なかった時代から、誰でも飲める時代になりました。それまでは、酒といえば日本酒でしたが、円高によって他の酒類との競争に初めて直面しました。にもかかわらず、造れば売れた時代が長かったので、各蔵元は競って規模を拡大していました。

生物学者の今西錦司が面白いことを言っています。『適応は適応能力を締め出す』例えば、恐竜は最初からあんなに巨大だったわけではなく、温暖で食物の豊富な環境に徐々に適応していった結果、あそこまで大きくなりました。それ自体は良かったのですが、いざ環境が寒冷化してくると、以前の環境に適応しすぎてしまったために、新しい環境に適応するには、あまりに巨大だったわけです。逆に哺乳類の祖先は、体のサイズが小さく、恐竜たちに怯えて暮らしていたわけですが、その小ささが幸いして、環境の変化を乗り切り、後の繁栄に至るわけです。同じことが酒蔵にも言えます。技術の進歩で、大量生産が可能になった、需要もある、その環境に合わせて増産をしていったわけですが、今になって一生懸命、蔵の規模を小さくしたりして、巨大な恐竜からの脱却をはかっているところですよ。

話は戻りますが、大学はちょっとした手違いがあって、5年ほどおりました。私が卒業した2000年は就職氷河期で、就職には苦労しました。それまで遊んでいた付けを目の前に出されたキリギリスの心境です。本と映画が好きだったので、その二つに絞りました。なんとか入ったのが、法令書を作る会社で、1000頁を超える、凶器として使えるような本を作ったりもしました。

勤めて8年、年齢も30という区切りで家業を継ぐことを決めました。理由は『自由』です。入社して何年かは、仕事も分からなかったことだらけで、覚えることもたくさんあり、充実感もあったのですが、段々と自分にとってこれは一生の仕事かと迷うようになりました。転職のために面接も受けましたが、なかなかこれという仕事を見つけれませんでした。

そこで、再び『自分は何なのか？何がしたいのか？』と考えるようになりましたが、幸い自分探しの旅に出るという行動をとることにはなりません。書店に一生かかっても読み切れない本があるように、一口に仕事と言っても、その数は膨大で、その中から何かを選ぶこと、その自由さに疲れたといってもいいかもしれません。私は働くまで、『自

由』というのは無条件に素晴らしいと思ってきました。現代の教育の結果ですね。

大学のあった東京では、特に、服装やふるまいという点で自由を謳歌しているように見えたのですが、よく考えてみれば、例えば、本来自由や個性を主張するファッションが、それ自体大量生産の規格品であるという皮肉や、違いの分かる珈琲を万人にすすめるという矛盾が目がつくようになりました。この辺りから段々性格が悪くなるわけです。

小熊英二という社会学者によると、製造業の就業者数が、農林水産業を抜いたのが1965年だそうです。それまでは、基本的に親のしている仕事を子が継ぐというパターンのほうが多数派だったわけです。

社会の中の自分の位置が定まらないため、自分で自由に仕事を選ぶことによって、社会の中で自分の立ち位置を決める人は少数派だったということです。多少、跡を継ぐのは不自由だと思った人もあったかもしれませんが、商工業者や農民、漁民は、自分の仕事を通じて社会のどの部分にどう貢献しているか分かりやすいわけで、それは生きやすかったらと思います。

周りは昔堅気の人だらけでしたので、私を跡取りの長男として扱いました。それは私にとってくすぐったいような、勝手に将来を決められてしまつて窮屈なような、もやもやしたものでした。会社勤めをしてみても、これは一生の仕事かと考えたときに、家業を継ぐのは基本的に自分しかないわけで、後継者がいなければ会社の幕引きを自分の代でするのも後ろめたく、仕事を求めて漂うよりは、病気の父を手伝うというのは、自分の拠って立つところとしては、分かりやすく、収まりがいいのではないかと、30にして初めてまさにあるべきこと、まさになすべきことを知ったわけです。

さて継ぐに当たって一つ大きな問題がありました。大きなというよりは致命的といったほうがいいかもしれません。それは酒が強くないということです。そこで調べてみたら、日本人などモンゴロイドは遺伝的にアルコール分解酵素が不活性で、飲めるは33%、飲めるが酔いやすい16%、あまり飲めない42%、下戸9%だそうです。よく鍛えれば飲めるようになるということが言われますが、それは元々飲める体質の方の話です。それで何かないかと思って探したら、いいのが見つかりました。福沢諭吉が言っているのですが、

『酒屋の主人、必ずしも酒客に非ず、

餅屋の主人、必ずしも下戸に非ず』です。

この餅屋のところを、ここ平田ではお菓子屋に変えると分かりやすいと思います。

こんな私ですが、今後とも末長くよろしくお願いいたします。

原稿より抜粋

